

道徳教育を基軸とした心の教育総合プラン

—「生きる」を見つめる教育を創る—

専攻 教育実践高度化専攻
コース 心の教育実践コース
学籍番号 P08037J
氏名 佐々木千佳

1. 問題の所在と本プランの方向性

殺伐とした犯罪事件が多発する昨今において、「命を大切にす教育の充実」がますます求められている。しかし、子ども達は非常に曖昧で刹那的な「生」を生きている。また、狭い人間関係の中で「傷つけあわない」ことを第一義とするような脆い友人関係を築いている。さらにA市が抱える課題をふまえた上で、本プランは「道徳教育を基軸とした『生きる』を見つめる教育」を展開することで、生徒たちに①「生きる意欲・活力となる『生きる』を見つめる力」や②主体的に他者とかがわることができるような姿勢や態度を身につけさせ、③「社会創成力」を育むことを目的とする。

本プランにおける「生きる」は「社会生活を営む中で他者や社会と影響を与え合いながら自らの在り方を模索し、望ましい『生』を実現」することであり、そのような「生きる」を見つめる力を主観的世界（わたしの「自己-他者理解」）、客観的世界（他者の「自己-他者理解」）、社会的世界（第三者の「自己-他者理解」）の3つの切り口全てを網羅する視点でとらえることが必要であると考えます。

2. 「生きる」を見つめる教育を創る

これまでの日本における「いのち」の教育の課題として、現実的側面から離れ、観念的であることが挙げられる。それを克服するため、筆者は「生

きる」を見つめる教育を①能動的、動的な「いのち」②生きることの素晴らしさだけでなく、生きづらさをも含む「いのち」③社会とのかかわりの中で考えるこれからの生き方・在り方の3点を考える教育として位置づけた。

J.ハーバーマスはコミュニケーション的行為によって、「主観的世界」・「客観的世界」・「社会的世界」の三つの社会的統合が可能となり、その結果、個人の「社会化」が達成されるのだという。この理論を学校教育に適応させ、生徒たち同士の相互主体的な討議（ディスカッション）を経て「生きる」を見つめる教育を展開することで、生徒個々の発達はもちろん、生徒たちが所属する「教室という社会」の発達をもうながすことができると考える。

3. 「生きる」を見つめる心の教育実践プログラム

上述の問題意識と理論的背景をもとに構成した心の教育実践プログラムは、心の教育のトボス（場）的基盤である学級経営を土台に、心の教育の根幹である道徳教育を要の道徳の時間を中心に実践し、そこでの学びを学級経営や生徒指導・教育相談などに関連を持たせ、道徳の時間で得た効果を還元していくことをねらいとして、8/27～10/9の期間で集中的に行った。具体的には3回の学活の時間、4回の道徳の時間での実践を中心とした。

またプログラムの検証には授業のワークシー

トや発言、事前・事後の社会的視点役割取得検査などを用いた。その結果、実践学級では社会的視点の段階への上昇が見られ、授業での逐語記録から、教師と生徒の一问一答式の授業から生徒相互の話し合いが連続して発生する中で学級の規範や話し合いの方向性を方向づけるような発言が生まれることがわかった。

4. 「生きる」を見つめる心の教育総合プラン

ひとがコミュニケーション的行為を行うとき、その言葉の意味理解はおのおのが身を置く「生活世界」を基盤として成立する。そのことをふまえると、生徒のコミュニケーション的行為を規定するような「生活世界」そのものへの働きかけや、「生活世界の再生産」がなされることが必要である。

つまり、本プランは家庭教育や社会教育とも緊密に連携関係をつくるのが前提なのである。特に学校と家庭が相互補完的な相互コンサルテーション的關係を構築し、段階的な協働を経て子どもの育てることが今後必要となるだろう。また、学校は社会と対立・並立關係に捉えられがちだが、学校は社会に内包されている。そのような発想で学校をとらえた時、学校はすべての人々にとって意味ある場所となりうるのではないだろうか。そのような学校の位置づけがあつてこそ、子どもたちは社会の一員として学校の「外」の社会に目を向けることができるようになるだろう。

そこで本プランにおける心の教育を「社会とのかかわりから生き方・在り方を考える『生きる』を見つめる教育」とし、その教育を自他のいのちの尊さや重みなどへの気づきや実感である「価値的側面」と社会生活を営むための知識や知恵、方法である「知識・技術的

側面」の二面からとらえ、前者が道徳の授業を要とする「道徳教育」において、後者は社会科や総合的な学習の時間、特別活動を中心とした「キャリア教育」において実践されるべき分野であると構想した。つまり、キャリア教育分野を道徳教育分野との関連において行うことで「生」の多面性、多様性をとらえる教育となりうるだろう。

また、生徒指導・教育相談分野はその結果培われた「生きる」を見つめる力を「個に応じて」弾力的に「調節」する機能を果たし、学級経営分野は「生きる」を見つめる力の基盤を形成するが、中学校ではその基盤は全教員の相互理解と協働のもとで育まれることが望ましいと考える。

5. 総合考察と今後の課題

「生きる」を見つめる教育は、網羅的な実践ではなく、系統性をもたせたプログラムとして個々の実践における学級経営分野や生徒指導・教育相談分野、キャリア教育分野との関連を明確に位置づける必要がある。また、本プランは1教員の個人技で成されるものであつてはならない。組織としての体制が整えられた上で、教職員が協働的に実践しなければ効果は期待できない。そのためには管理職の理解や指導力はもとより、全教職員の連帯と熱意、そして実践力が不可欠である。

現場の1教員としてまだまだ力の及ばない点の多い筆者ではあるが、A市の子どもたちに本当に必要な力をつけるために、本プランの実現をめざして今後も「生きる」を見つめる心の教育に挑戦し続けていきたい。

修学指導教員	渡邊	満
指導教員	淀澤	勝治